書き抜き読書ノート 2176	2016 年 7 月 31 日

沢村貞子著「私の浅草」暮しの手帖社 1996 年 10 月 4 日刊を読む

私の浅草—花火—

１．梅雨が明けると、浅草界隈のせまい路地の家はもう蒸し暑い。

２．夕飯をすますと、男たちは、うちわ片手に外へ出る。どこの軒下にも、長っぽそい竹や木の縁台が置いてある。それにまがって、将棋に興じる若い衆たち。片ひざたてたり、あぐらをかいて、世間話に花を咲かす親父さん。やっと、あと片づけをすましたおかみさんが、たすきをはずしながら、

３．「今夜は本当に風がないねえ……」
などと言いながら、ちょっと胸をはだけて空を見上げる。せまい庭のたらいで行水して、首にたっぷり汗知らずを叩いてもった子供たちは、洗いたての、こざっぱりした浴衣を着て、あっちの縁台に腰をかけたかと思うと、こっちの縁台をのぞきこんだり————とんび歩きが好きだった。

４．そのうち誰かが、
「オーイ、花火持ってきたぞ——」
と声をかけると、どっと、そこへ集まってきて、
「俺にやらせろ」
「今度は私に持たせてよ」
など、引っ張りっこの大さわぎ。

５．シュルシュルッと音をたてて、くるくるまわるねずみ花火。パーッと明るく、五色の火が吹き出る電気花火。女の子は縁台の端に、ちょっと気取って斜にかまえ、パチパチと花を咲かせる線香花火を前につき出すようにして、
「私の松葉の方が大きくて、きれいよ」
「あーら、私の菊を見てごらんな」

６．どっちが先きに燃えつきて、小さい火玉が地面におちるか……。いい大人までが、
「おい、おじさんにも一本……」
と徳用マッチの箱を持って寄ってくる。

７．毎年、7 月 21 日は、両国の花火大会ときまっていた。夜空に一瞬ひらく大輪の花火は、子供たちの夢だった。

８．家並みの建てこんだ浅草の裏からでは、物干し台の手すりへのぼっても、ほとんど見えなかったが、ボーン、ボーンと打ちあげの音がきこえるたんびに、

「玉やぁ……」
「鍵やぁ……」
とはやしたてているのはおかしかった。

9．たった一度、父にせがんで、船に乗って花火見物をしたことがある。私も弟も嬉しくて、横丁の子供たちに、
「今夜、あたし達、両国の花火、見にゆくの」
「船で隅田川をくだるんだぜ」
などと、言いふらしたものだった。

10．しかし……船は船でも、伝馬船の乗り合いは、ぎっしり混んで身うごきも出来ず、傍に癖のわるい酔っぱらいのおじさんがいて、うるさくからみ、浴衣の袖がぬれたりして、ベソをかいたのをおぼている。
それでも、はじめて間近かに見る花火は息をのむほど、きれいで大きかった。〈ナイヤガラ〉という仕掛花火の点火してゆく早さ、流れ落ちる火の粉のすさまじさ――父や弟の顔がその明かりを受けて、くらがりに浮き出るように見えた。

11．けれど、つぎの年の夏がきても、私たちは、もう一度、両国の花火を見に行こう、とは言わなかった。
「…花火見物は、やっぱり、料理屋の床(ゆか)か、屋根船を仕立てなけりゃあね……」

12．そんな大人たちの声が耳にはいり、子供心にも、そういう、ごたいそうなことの出来る身分でないことを、ちゃんと知っていたからである。

13．「あんなもん、一度見りゃたくさんさ。今年は、うちの前で、ねずみやデンキを盛大にやろうぜ。姉ちゃんにも、線香花火、うんと、買ってやらあ、浅草花火大会だぁ――」

14．宮戸座の子役と、その付き人の姉は、そんな負け惜しみを言いながら、その日がくると、やっぱり、また、空を見上げて、
「たっまやぁ……」
「かっぎやぁ……」
と、ちょっとむなしい大声を立てたものである。

P130 ～ 132

＜コメント＞
NHK 朝の TV ドラマ「とと姉ちゃん」の舞台となっている「暮らしの手帖」に掲載された女優沢村貞子さんのエッセイをまとめた「私の浅草」。NHK 朝の TV ドラマ「おていちゃん」の原作にもなった作品。夏の風物詩、花火をはじめ、日本の文化の素晴らしさを描いたポンポンとテンポの早い洒脱（しゃだつ）な文章が満載されている。是非、御一読を。

― 2016 年 7 月 31 日（日）　林　明夫記―